

シェリーとその周辺——I

加藤 芳子

序 「ルナー・ソサイアティー」

英国のロマン派の詩人パーシー・ビッシュ・シェリー Percy Bysshe Shelley (1792-1822) は、当時の最先端の科学知識を背景に、その作品を書いている面がある。その中心的存在は、イートン校時代の科学の教師、リンド博士 Dr. James Lind (1736-1812) であり、その従兄弟が中心メンバーの1人であった、いわゆる「ルナー・ソサイアティー」 The Lunar Society of Birmingham [以下「ルナー協会」とする] のメンバー達と、そして彼らと親交の深かった科学者や技術者や探検家達であった。

「ルナー協会」なる組織は、英国の「産業革命」の主な原動力となり、18世紀後半から19世紀を通し現代の技術へと、多大な影響を与えた。メンバーが満月の頃に集まった事から、the Lunatics つまり変人達として有名であったが、個人的な集まりだったために、公的な記録は残っていない。以下、キング・ヒーリー D. G. King-Hele やショフィールド R. E. Schofield 等の研究や、『英国人名辞典』 *DNB* 等を参考にして、彼らの活動をまとめてみる。

「ルナー協会」なる組織はそもそも、1766年頃に、マシュー・ボルトン Matthew Boulton (1728-1809) とエラズマス・ダーウィン Erasmus Darwin (1731-1802) との友情から始まった。1760年代は萌芽期、1770年代が最盛期で、1780年代には衰退し、1790年代には消滅していく。

英国最高の科学の学会として君臨していた「英国王立協会」 Royal Society of

London は、1700 年から 1750 年頃には既に衰退していた。その理由は、フックの法則を発見した物理学者ロバート・フック Robert Hooke (1635-1703) や、万有引力の法則を発見した、物理学者・数学者で 1703 年から 1727 年まで「王立協会」の会長であったサー・アイザック・ニュートン Sir Isaac Newton (1642-1727)、ハレー彗星の軌道を計算した天文学者・数学者のエドモンド・ハレー Edmond Halley (1656-1742) 等の、17 世紀の偉大な科学者達が次々と亡くなっていった事に加えて、会長に科学者以外の人物を余りに選任し過ぎたからだと言われている。

「王立協会」が再生するのは、1780 年代にサー・ジョウゼフ・バンクス Sir Joseph Banks (1743-1820) が会長に就任して 42 年もの間会長となり、「ルナー協会」のメンバーのほとんどが (14 人中 11 人) が研究員 Fellow となり、その大半が「王立協会」の機関誌『哲学会報』*The Philosophical Transactions* にその論文を掲載するなど、「王立協会」の中心的役割を果たしていくからである。

「ルナー協会」のメンバーは産業界と接触があり、実践的であった。その殆どが地方出身の成り上がりで、英国国教会は支持せず、ロンドン在住の支配階級、貴族、政府の権力などに対抗し、政治的にはフランス革命を歓迎し、ウェッジウッドに至っては、奴隷制度廃止運動を支持するために、鎖につながれた奴隷の絵の入ったカメオを製造して、その運動を助けたのは有名な事である。

「ルナー協会」はたいていは、満月の前の日曜日に会長ボルトンの家で開かれたが、会長が留守の時には何カ月も開かれなかったこともあるし、ジョウゼフ・プリーストリー Dr. Joseph Priestly (1733-1804) は司祭だったので、彼が出席する時は日曜日をさけて、月曜日に変更された。大体は 6 - 8 人が出席し、誰かが科学的話題について話し、それを試す実験の提案と、実験の結果の報告が、夕食をはさんで長時間にわたり行われた。

ショフィールドの研究によると、「ルナー協会」のメンバーは 14 人で、主要メンバーは年令順に並べると、以下のリストの冒頭の 8 人となる。

- 1 Matthew Boulton, 1728-1809
- 2 Josiah Wedgwood, 1730-1795
- 3 Dr. Erasmus Darwin, 1731-1802
- 4 Dr. Joseph Priestly, 1733-1804
- 5 Dr. William Small, 1734-1775
- 6 James Keir, 1735-1820
- 7 James Watt, 1736-1819
- 8 Richard Lovell Edgeworth, 1744-1817
- 9 John Whitehurst, 1713-1788
- 10 Dr. William Small, 1734-1775
- 11 Dr. William Withering, 1741-1799
- 12 Rev. Robert Augustus Johnson, 1745-1799
- 13 Samuel Galton, 1753-1832
- 14 Dr. Jonathan Stokes, 1755-1831

彼らは広範囲にわたる興味や才能を持っており、科学・技術のみならず、芸術や教育、更には奴隷解放などにも熱狂的で、全般に革新的であった。この中の6番目のジェイムズ・ケアーが、ロマン派の詩人 P. B. シェリーがイートン時代に科学を教わったリンド博士といとこ同士で、2人とも同じエディンバラ大学の医学部で学んでおり、生涯仲が良かったのである。

しかもリンド博士は、1766年に東インド会社の外科医としてインドに赴任し、現地に滞在しつつ中国にも旅行し、1772年7月12日からは、サー・ジョウゼフ・バンクス Sir Joseph Banks (1743-1820) なる植物学者と共にアイスランドに火山の研究調査に同行している。

更にバンクスは1777年から1819年まで「英国王立協会」の会長となるのであるが、若い頃には、かのクック船長 Captain James Cook (1728-79) の探検に植物学者として同行し、オーストラリア、ニュージーランド、南極その他の探検や、金星の通過の観測などにも同行していたのである。

「ルナー協会」の主要メンバーがバンクス会長のもとで次々に「王立協会」の研究員になっていく頃、1766年に、有名な人物で研究員になっている人がもう1人いる。火山学の祖と言われるサー・ウィリアム・ハミルトン Sir William Hamilton (1730-1803) である。¹ 彼は1764年から1800年までの36年もの間、ナポリ公国宮廷駐在英國特命全権公使、つまり外交官であったが、イタリア各地の火山活動と地質等を観察し、その報告書を「王立協会」の機関誌『哲学会報』*The Philosophical Transactions* に多数の論文を掲載している。シェリーはこれらの論文のことをイートン校時代に、リンド博士から聞いていたと思われるのである。

リンド博士の親友には、天王星と銀河系内星雲を発見したサー・ウィリアム・ハーシェル Sir William Herschel (1738-18221) もおり、2人はウィンザーに住んでいて行き来していた。

シェリーに影響を与えたと思われる人々の中には、リンド博士を中心に、そのいとこのジェイムズ・ケアーも中心メンバーだった「ルナー協会」のメンバー達と、サー・ジョウゼフ・バンクス、クック船長、サー・ウィリアム・ハミルトン、サー・ウィリアム・ハーシェル等がいるが、本論ではまず、リンド博士とジェイムズ・ケアーの略歴と業績を紹介していく。

(1) Dr. James Lind (1736-18121)

リンド博士は1736年5月17日にスコットランドのエディンバラの名家に生まれた。妻はアン・エリザベス・ミーリー Anne Elizabeth Mealy である。リンド博士の叔父はエディンバラの市長で、英国議会の議員であった。いとこのジェイムズ・ケアー James Keir (1735-1830) とはほぼ同じ年で一緒に育ち、エディンバラ大学の医学部に一緒に入学している。卒業後2人は違う道を歩むが、家族の絆は強く、その付き合いは生涯続いた。

1767年にケアーはイングランド中部地方に引っ越し、「産業革命」の中核となる「ルナー・ソサイアティー」[以下ルナー協会]なる組織の中心的存在の1人

となる。この頃のケアーの親友には、「ルナー協会」の精神的指導者的存在であったマシュー・ポルトンや、蒸気機関を改良したジェイムズ・ワット、雲や光合成の仕組みを発見した博物学者・医師・詩人のエラズマス・ダーウィン [進化論を唱えたチャールズ・ダーウィンの祖父]、酸素を発見しソーダ水を発明したジョウゼフ・プリーストリー、そして陶芸家のジョサイア・ウェッジウッド等、そうそうたる面々がいた。

ケアーは1780年にティプトン・アルカリ製作所を創設し、新しい方法でソーダを作り、近代化学産業の祖と呼ばれる。リンド博士は、いとこのケアーを通して、化学と工学の最新の発達を知ることになるし、ワットを通して「ルナー協会」と関係している。ワットが蒸気機関の改良を発明した頃に、リンド博士は20才の頃で、ワットの親友であった。

1765年12月にリンド博士は29才にして、東インド諸島の船の外科医として、インドや東インド諸島、中国等を旅行し、色々な物を収集する。主な物は、中国の芸術工芸品や望遠鏡、更には、西洋ではコランダム（鋼玉石）として知られている、ダイヤモンドに次ぎ堅い鉱物の最初の標本など、不思議な物ばかりであった。彼はインドのベンガル地域で流行していた熱病について学位論文を書き、1768年にエディンバラ大学で医学博士号を取得している。論文のタイトルはラテン語で、‘De Febre Remittente Putrida Paludum quae grssabatur in Bengalia A. D. 1762’である。

1769年にリンド博士は、エディンバラ近くのホークヒルで、金星の通過 Transit of Venus、つまり日食の観測をし、その記録は「英国王立協会」の機関誌『哲学会報』の第59号に、王室天文学者ネヴィル・マスケリン Nevil Maskelyne のコメント付きで出版されている。ホークヒルでの月の蝕に関する観測報告も、同じ第59号に続けて掲載されている。

リンド博士は、1770年11月6日に、母校のエディンバラ大学医学部の研究員 Fellow に任命されると、1772年には学位論文の英訳 ‘Treatise on the Fever of 1762 at Bengal’ を出版している。

リンド博士は、ヘブリディーズ諸島の1つのイズーリ島の正確な緯度を測定

し、地図も作成しているし、1772年にはサー・ジョーゼフ・バンクスと、アイスランドでの科学調査旅行に参加している。この探検は、アイスランドの火山の調査が目的であった。バンクスは若い頃に、かのクック船長 Captain James Cook (1728-79) の航海に同行し、オーストラリア、ニュージーランド、南極など、各地で植物の標本を採集し、種子などを英国に持ち帰っている。クック船長の探検は、金星の通過の観測も目的の1つであった。

1775年5月11日に「英国王立協会」で口頭発表された、アフリカの砂漠の風「ハルマッタン」を測定するための、移動式風力計に関するリンド博士の論文は、「英国王立協会」の機関誌『哲学会報』の第65号(1775)に掲載された。これには、リンド博士がロイ大佐に宛てた書簡が添えられており、「王立協会」会長のサー・ジョン・プリングル Sir John Pringle (1707-82) に贈呈した、彼の風力計に関する言及がある。

1777年にバンクスが「王立協会」の会長になると [1777-1819]、リンド博士は同年12月18日に研究員 Fellow に選ばれ、ウィンザーの英国王家お抱えの医師となり、以後30数年にわたりウィンザーに住む事になる。英国のロマン派詩人 P. B. シェリーがリンド博士と出会ったのは、シェリーがイートン校に通う学生で、博士が近くのウィンザーに住んでいたこの頃という事になるが、その頃博士は既に70過ぎの高齢であった。博士は、医学の他に、気象学と天文学にもすぐれていた。

この頃、リンド博士の親友サー・ジョン・フレデリック・ウィリアム・ハーシェル Sir John Frederick William Herschel (1738-1822) も、ウィンザーに住んでいた。彼は、英国国王お抱えの天文学者の職にあり、太陽系の惑星「天王星」と、2500もの銀河系内星雲を発見している。

特に1783年5月4日の晩に、リンド夫妻がハーシェルと夕食を共にした後、ハーシェルが望遠鏡で、月が星の前を通過するのを見ていた時には、月の明るい点、つまり「月の火山」を初めて観察する場面に、リンド夫妻は居合わせているのである。

リンド博士は、1812年10月17日に、ロンドンのラッセル・スクウェアの、

娘婿ウィリアム・バーニー William Burnie の家で亡くなっている。

リンド博士は以上のように、当時の最新の科学技術に精通していたし、その中心的権威とも親交があった。それで、シェリーがウィンザーの彼の家に呼ばれた時には、リンド博士が親友の科学者達の話をする、シェリーは夢中になって聞いたようである。リンド博士は、当時の第1線の偉大な科学者達と親交があり、科学の進歩と人類の未来に対する科学の貢献の可能性に関する熱狂的信奉を、最も多感なイトン校時代のシェリーに抱かせたようである。

リンド博士はまたシェリーに、エラズマス・ダーウィンの詩を紹介し、科学と詩を結びつけるという独特の世界へと導いた。

シェリーが出会った頃のリンド博士はまた、白髪の高背の老人で、70才を越えており、その東洋趣味や不思議な趣味や行動は、シェリーに「ゴシック趣味」を持たせる事になったと言われている。

博士はまた、「ルナー協会」のメンバーの大半と同様に、権威に対する対抗心が強く、秘かに独特の方法で出版物も出したりしており、更にはシェリーにプラトンや、ウィリアム・ゴッドウィン William Godwin (1756-1836) の急進的思想などに基づく作品を書いていくのに、多大な影響を与えているのである。

リンド博士の死の5年後の1817年に書かれたシェリーの *Prince Athanase* の中の Zonoras や、*The Revolt of Islam* (1818) の中に登場している「隠者」は、リンド博士がモデルだとも、言われているのである。

シェリーのオックスフォード大学時代の学友ホッグ Thomas Jefferson Hogg (1792-1862) の『シェリー伝』によれば、シェリーはリンド博士に対する愛情を、みずから次のように述べていたという。

I owe to that man far, ah! far more than I owe to my father; he loved me, and I shall never forget our long talks, where he breathed the spirit of the kindest tolerance, and the purest wisdom.

この一節を読めば、ホッグが時に大げさに表現するという事を差し引いても、既に高齢のリンド博士が、若く聡明なシェリーを、いかに可愛がり、どれだけ長時間にわたって、何度も何度も、科学する楽しさを教えたかが、ありありと目に浮かぶようである。

(2) James Keir (1735-1830)

ジェイムズ・リンド博士 Dr. James Lind (1736-1812) のいとこのジェイムズ・ケアーは、1735年にスコットランドのエディンバラに生まれ、リンド家と一緒に育てられた。リンド博士と同じエディンバラ大学医学部に学ぶ。

1755年に医学生の際にケアーは、エラズマス・ダーウィン Erasmus Darwin (1731-1802) の友人となる。ケアーはその後数年軍隊に入隊するが、1768年にヘアー・ハッチで数ヶ月間エッジワース Richard L. Edgeworth と過ごした後、バーミンガムの西数マイルの所にある、ウェスト・プロミッチに移住する。ケアーはすぐに「ルナー協会」に夢中になり、かなりの常識人でもあったので、その中心的役割を果たす。ケアーは化学を得意としたので、かのジェイムズ・ワット James Watt (1736-1819) はケアーの事を「素晴らしい化学者」と呼んでいた。

1780年にケアーはティプトン・アルカリ工場を創業したが、これは近代的化学工業の始まりと見なされている。彼は塩からソーダを作る事に成功したのである。

リンド博士の従兄弟のケアーがこの様に、「ルナー協会」の中心的存在だった事から、ロマン派詩人の P. B. シェリーが、リンド博士と従兄弟であったジェイムズ・ケアーを通して、「ルナー協会」のメンバーのそうそうたる科学者達の話を知り、夢中になった事は十分にあり得る事であった。

注

- 1 Sir William Hamilton に関しては、以下の拙論を参照されたし。

加藤芳子、「シェリーとその周辺 — II」、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』、第 61 号、2004 年、pp.95-102。

P.B.シェリーに対するハミルトンの影響に関しては以下の拙論を参照されたし。

Yoshico Cato, “‘Ode to the West Wind’ and Volcanology”、札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』、第 61 号、2004 年、pp.67-83。

ハミルトン卿著の『カンピ・フレーグレイ』の内容については、以下の拙論を参照されたし。

加藤芳子、「Sir William Hamilton — 古典と科学の出会い」、日本ジョンソン協会編、『十八世紀イギリス文学研究、第 2 号、文学と社会の諸相』、開拓社、2002 年、pp.363-381。

参考文献

— . *A Dictionary of British and Irish Travellers in Italy 1701-1800*. Compiled from the Brinsley Ford Archive, by John Ingamells, New Haven and London: Yale Univ. Press, 1997. Published for the Paul Mellon Centre for Studies in British Art.

— . *DNB*. London, 1893.

Constantine David. *Fields of Fire: A Life of Sir William Hamilton*. London:

Weidenfield & Nicolson, 2001.

Hogg, Thomas Jefferson. *The Life of Percy Bysshe Shelley*. London, 1933.

King-Hele, Desmond G. 'The Lunar Society of Birmingham,' *Nature*,
Macmillan, 1966.

King-Hele, Desmond G. 'Shelley and Dr. Lind,' *Keats-Shelley Memorial
Bulletin*, No. XVIII, 1967, pp. 1-6.

Schofield, R. E. *The Lunar Society of Birmingham*. O.U.P., 1963.